



Title	0. L. R. 発刊20年に寄せて
Author(s)	石田, 久
Citation	Osaka Literary Review. 1981, 20, p. 8-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25619
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

O. L. R. 発刊20年に寄せて

石 田 久

昭和37年阪大大学院で英文学、英語学を専攻する学生が研究誌 *Osaka Literary Review* を出してから20年という時間が過ぎた。五里霧中ながら、何か始めねばならないという熱意と焦燥感と、そして多少の自負心からそれは生まれたのであろう。今第1号の編集後記を見ると、同人の数は14名。記憶を頼りに当時の学年分けをして見ると、博士課程3年1名、2年3名、1年2名、修士課程2年6名（含論文提出延期者1名）、1年3名となる。大学院を離れた人も残り、一方毎年新しく入学して来る方々を迎え、同人の数は2号15名、3号21名、4号25名、5号29名と増え続け、基礎も固まって行った。人数の増加がそのまま雑誌の発展となっていたことは、ある意味では非常に幸せなことであった。

第1号は森、梅垣両氏の編集で、内外印刷で刷ってもらっている。何分14名であるから、いかに名編集人といえども財政難は必至。追加徴収で何とかやりくりしたものの、第2号からは、とても出版社に頼むことはできないという情勢であった。しかし第1号出版の反響は大きく、懇切な批評や激励が多く寄せられた。その感銘の中で同人たちは次号発行への決意を新たにしたのであった。第2号の編集を引き受けた柏木氏と私は、先輩諸氏の助言で、大阪刑務所に印刷を依頼しに行った。刑務所側は非常に好意的で、費用の安さもあって以後数号はここで出してもらうことになった。遠くもあり、活字に制限もあったが、何としても続刊したいという熱意から、代々の編集者は刑務所通いをするようになった。第2号がとにかく出るまでには様々なエピソードがあったが、中でも刑務所にない活字を町の活字屋へ買いに行ったことが忘れられない。森氏がデザインした題字の凸版も刑務所に届けたことは勿論である。

こうして大学院生は発表機関を自らの手で創り上げて行き、それにつれて研究活動も充実した。それは阪大英文科が村上先生の御着任後まもなく毛利、山川両先生を得て拡充の途についたのと時期を同じくしている。大学院生も活発に学会発表に参加し、ほぼ毎号それらの草稿に加筆したものが寄せられている。本誌が当初から相当の水準を保っていたことのひとつの証拠であろう。

O. L. R. 創刊の頃は全国各大学でも次々と大学院生の研究誌が生まれた。それらの中で今日まで続いているものは殆んどないのではなかろうか。困難な状況の中でこの雑誌が発展し続けたのは、この雑誌の発行母体が大学院英文学談話会という、純然たる同人会とはちがひ、半ば公的な性格をもった会である点にあらう。発刊当初の藤井氏の「半官半民のような」という先見の明の賜であらう。と同時に各号の編集者、寄稿者の努力の蓄積が大きく貢献していることはもとよりである。

O. L. R. にとって一つの大きい出来事は、ある時期に一定以上の年数を経た同人が「卒業」したことであらう。これも色々と論議のあったところで、結局はうまく足並みがそろひ、しかも次の代への引継ぎを支障なく行なうことができた。こうした若返りは、無限に同人の数が増えて、各人の関心が薄れ、名目だけの同人になってしまったり、余りにも年代が離れて遠慮なく批評し合える雰囲気なくなったりすることを防ぐ上で必要なことである。が一方では、研究誌としての水準を保つ上からも、刊行母体を強固にしておくためにも、余程慎重に考えるべきであらう。

O. L. R. のような形の同人研究誌は貴重な存在である。特に同人にとっては。それは執筆者がよく知っている人で、身近かにいるということである。日頃の議論や談笑の中で語られるある人間のアイディアが論文の形で整理されたものを読むことは興味深いだけでなく、大変役に立つものである。その点では私は大いに先輩諸氏に学ばせてもらった。いくつかの論文を再三熟読し、方法からスタイルまで十分に検討し、合評会や個人的な場で話を聞いた。更に、自分の専門以外の分野についての知識をこれ程直接

的且つ有意義に得られる場は少ないのではなからうか。O. L. R. の現在の同人の皆さんが、お互いに研鑽を続けられて、ひとりひとりが何かを獲得してゆかれることを祈りたい。それがまたそのまま同誌の発展につながるのである。

最後に私事を語らせてもらえば、丁度10年前に京都工芸繊維大から阪大に移り、再び先生や先輩に混って恵まれた日々を送っています。卒業論文で『ハムレット』と『スペインの悲劇』を取り上げてからずっとエリザベス朝の演劇を読み続けておりますが、回り道ばかりしている感が強く、O. L. R. 発刊20年という時間の重みが突然意識にのぼってうろたえているのが現状です。